

女をうしなう光源氏

——青年期の喪失体験——

上野 辰義

〔抄 録〕

光源氏の人生は、晩年に最愛の妻紫上をうしなった際、幼少期から世の無常を悟るべく仏によって仕組まれたものであったと、本人によって自覚される。その認識の中核は、愛すべき人々との別れ、喪失体験の蓄積であったが、これまで、その述懐における認識がこうした視点から見直されることはなされずに来た。光源

氏の人生把握の内実を理解するには、この喪失体験の蓄積を、一つ一つ検証して積み上げていくことが重要だろう。空蟬との体験を扱う本稿はその作業の一つである。

キーワード 源氏物語 光源氏 喪失体験 空蟬 夕顔

一 はじめに

光源氏は世俗の人として五十二年の生涯を送った。それ以後何年かは、出家者として過ごしたが、その生活は源氏物語に語られない。真摯に仏道修行に励む光源氏の姿を語れば、それは宗教文学となり、世俗の生活を送る当時の貴族女性をはじめとする読者の興味を惹くところではなくなる。だが、道心を抱いて出家遁世を目指しても、それに至る世俗での迷いの生活は、人生に不如意や苦悩が不可避で、時代が閉塞感を強めていく状況にあつては、重いテーマではあるものの、物

語で語られうる人生でありえたのである。

光源氏の人生は、あるいは紫上のそれとともに、そうした内実を備えたものであつただろう。彼は、三十九歳で准太上天皇となり、四十歳で内親王を妻として迎えるという、栄華の頂点に昇りつめながら、その数年後四十七歳の正月には、三十七歳の厄年に至つた紫上に慎みを求めたついでに、自己の人生を振り返つて次のようにいう。

「みづからは、幼くより、人にことなるさまにて、ことごとしく生ひいでて、今の世のおぼえありさま、来しかたにたぐひ少なくなむありける。されど、また、世にすぐれて悲しき目を見るかた

も、人にはまさりけりかし。まづは、思ふ人にさまざまおくれ、残りともれる齡の末にも、飽かず悲しと思ふこと多く、あぢきなくさるまじきことにつけても、あやしくもの思はしく、心に飽かずおぼゆることそひたる身にて過ぎぬれば、それにかへてや、思ひほどよりは、今までもながらふるならむ、となむ思ひ知らる。…」（若菜下一一六三）

光源氏は、自分は幼少期から世の人とは異なる目に立つ美質を備えて育ち、現在の地位世評も、過去にもそう例のないはなやかなものだが、また一方格別に悲しい体験も人以上にしてきた、といつて、その悲しい体験の内実を、肉親や愛する人々に先立たれたこと、いまだに不満で悲しく思うことが多いこと、つまらぬことに思い悩みがちで、不満に思うことが無くならない境遇であること、等であると告白している。引用文中の「思ふ人」は、『細流抄』（源氏物語古注集成7）が「夕顔上葵上薄雲など也」というように、光源氏が愛した人物をも、また『岷江入楚』（国文学註釈叢書）が「母更衣。外祖母。父御門などの事もこもるべき歟」というように、自分を愛してくれる人をも、ともに指す。しかし、この時の述懐は、いまだ煩惱、世俗の塵にまみれている。

だがその四年後の秋、紫上を喪つて涙の乾くことのない日々を送る中で、光源氏は次のように思惟する。

いにしへより御身のありさまおぼし続けるに、鏡に見ゆる影を始めて、人にはことなりける身ながら、いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめ給ひける身を、心強く

過ぐして、つひに來しかたゆく先も例あらじとおぼゆる悲しきを見つるかな、今は、この世にうしろめたきこと残らずなりぬ、ひたみちに行ひにおもむきなむに、障りどころあるまじきを、いとかくをさめむかたなき心まどひにては、願はむ道にも入りがたくや、とややましきを、この思ひ少しなのめに、忘れさせ給へ、と阿弥陀仏を念じたてまつり給ふ。（御法一三九五）

紫上の喪失という、光源氏の生涯最大の悲嘆を体験して、「今は、この世にうしろめたきこと残らずなりぬ」と、出家におもむく障害となる世俗への執着はなくなつた、と思惟して、これまでの、常人とは異なる美質をもちながら、幼少時からの「思ふ人」喪失体験が連続する己の生涯は、この悲しく無常の世を知るべく仏の仕組んだものだったのだと観念する。この述懐では、四年前の述懐に見えた人生の不如意・不満の言葉が消えている。己の人生をそのまま受け入れている。

光源氏は翌年正月にも、これとよく似た内容の述懐を女房に披露している。

「この世につけては、飽かず思ふべきことをささあるまじう、高き身には生まれながら、また人よりことに口惜しき契りにもありけるかな、と思ふこと絶えず。世のはかなく憂きを知らすべく、仏などのおきてたまへる身なるべし。それをしひて知らぬ顔にながらふれば、かくいまはのゆふべ近き末に、いみじきことのとぢめを見つるに、宿世のほども、みづからの心のきはも残りなく見はてて心やすきに、今なむつゆのほだし亡くなりたるを、これかれ、かくて、ありしよりけに目馴らす人々の今はとて行き別れ

むほどこそ、今ひとときは心乱れぬべけれ。いとかなしかし。
わろかりける心のほどかな」とて、御目おしのごひ隠したまふに、
(幻一四〇六)

この幻巻の述懐と御法巻の述懐の差異については、既に考察したことがある³⁾。詳細はその拙論によっていただきたいが、概括して言えば、御法巻と幻巻の二つの述懐の間には、紫上喪失後の衝撃の強さから、世の無常と愛執の強さが前面に出ている御法巻のそれと、紫上の死を契機に自己の人生の終末を見据えて己の宿世の意味と性向の限界を見つめている幻巻のそれという差がある。大まかには深化といつてよいが、若菜下での述懐から幻巻の述懐に至る深化の過程には、それをもたらしたいくつかの契機が想定しうる。

若菜下では、常人とは異なる美質をもって生まれつき、格段の繁栄を手に入れながら、愛する人々との縁の薄さ、尽きることのない人生への不満が吐露されていた。このうち、愛する人々との繰り返される別れの悲しさは、御法巻におけるその最大最後の事件紫上喪失により、すべてが呑み込まれ総括される。前述の拙稿で触れたように、尼になることを不断に望んでいた紫上を、最後まで己の都合のために出家させずにいたために、紫上の病気の回復と延命・往生への道という、自己に関わる出家の功德も得ることなくもたらされた紫上の死を体験して、光源氏は己の愛執の深さと仏罪とを自覚し、恐らくはその背後に、世俗に泥んで遅々として出家しようとしないう自分への仕置き・仕向けとして、御法巻の述懐における仏の導きを意識するようになったのだと思われる。そして、尽きることのない人生への不満も、若菜下巻の

述懐以後、光源氏の身にふりかかった、いわゆる柏木事件、正妻女三宮と柏木の密通発生と不義の子薫の誕生、この秘密を一人呑み込んで、自己の過去における父帝の妃藤壺宮との密通と冷泉帝の誕生、父帝への裏切りを、わが身において再現されることで、多くは整理されたと思われるが（正妻が犯され尼になったことなどについては薫誕生後も不満が消えずにいる）、それも、最後には最重要の存在である紫上を喪失することによって恐らくは意味を失ったのだろう。御法巻の述懐から幻巻の述懐への深化には、紫上喪失の当座の動揺感溺も、女方に籠って外部との接触を断つことで次第に落ち着き、女方で、女房達と紫上の思い出話を重ね、不完全ながらも紫上への理解を深めたこと、紫上を苦しめ続けた自己の他の女性への執着の反省・否定、自己の人生の終末意識の増加、などの要素も関わる。

このように、光源氏が最終的に自分の生涯を把握し受け入れ、出家に現実足踏み出すことには、紫上の喪失体験が最大の働きをし、不可欠な事件であった。

では、その、紫上の喪失体験とは、光源氏にとってどういうものだったのだろうか。それは直接には紫上が亡くなる御法巻から光源氏が、「悲哀の仕事」(mourning work)、すなわち、喪った紫上に対する思慕の情、くやみ、恨み、自責をはじめ、紫上とのかかわりの中で抱いていた、さまざまな精神的な関係を再体験し、その心理過程を通して、紫上とのかかわりを整理し、心の中で紫上像をやすらかたで穏やかな存在として受けいれるようになっていく心理的営み⁴⁾をどのように遂行して、幻巻末に明年の出家を準備するまでに至るかを追っていけば

よい。だが、それは一方、「いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめ給ひける身を、心強く過ぐして、つひに來しかたゆく先も例あらじとおほゆる悲しさ」であり、「世のはかなく憂きを知らすべく、仏などのおきてたまへる」ところの「いまはのゆふべ近き末に（体験させられた）いみじきことのとぢめ」であると、光源氏によって認識されていた。光源氏の人生における、「思ふ人にさまざまおくれ」という、一連の喪失体験の最大最後の集大成でもあったのである。であるから、光源氏の喪失体験を回顧して、それとのつながりで紫上の喪失体験を位置づけることも、紫上の喪失体験の性格と意味を理解するうえで、必要なことであるのである。

私はその作業の一環として、そして光源氏の喪失体験の前史として、父桐壺帝における桐壺更衣喪失の体験を、分析してみた。^⑤ここでは、父桐壺帝が桐壺更衣を喪つて行なつた悲哀の仕事は、光源氏が紫上を喪つて行なつた悲哀の仕事と、ともに最愛の女性を喪つた際のそれとして、基本的な構造の対応を示しながら、父の場合は、若い帝王としての喪失体験と悲哀の仕事であり、息子の場合には、青年期からの幾多の喪失体験を経てきた人生の果ての、晩年における最愛の女に関する喪失体験であり、かつ悲哀の仕事であることによる相違点をみせていた。

次には光源氏自身の喪失体験の歴史をたどつてみなければならぬ。その第一段階として、ここでは、光源氏の最初の喪失体験である空蟬との別れを考えてみたい。これ以前、三歳時の母桐壺更衣の喪失と、六歳時の祖母の喪失は、それが光源氏に与えた精神的影響を考え考慮

することは大事だが、その時の光源氏がなした悲哀の仕事のさまは分析できるほど十分に語られていない。（推測はできるだろう。別に考えてみたい。）また、空蟬との生き別れは、「思ふ人にさまざまおくれ」という死別ではないが、精神分析学にいう、「対象喪失」(object loss)、「近親者の死や失恋をはじめとする、愛情・依存の対象の死や別離」・「住みなれた環境や地位、役割、故郷などからの別れ」という体験に含まれ、喪失体験として悲哀の仕事（喪失の仕事）を伴うべきものである。そして、それは、空蟬との主要な物語が展開する帯木三帖の後半、夕顔巻で語られる夕顔との交渉・喪失とも、一連の体験として把握され、理解されるべきものである。

二 空蟬の喪失体験

光源氏と空蟬、そして夕顔との交渉の物語は、常陸から上京して逢坂の関で邂逅した後、継息子から言い寄られて尼になつた空蟬が光源氏の二条東院に引き取られるまでの後日譚はあるが、男女としての交渉の物語は、光源氏十七歳の夏から立冬の日まで、巻で言えば帯木・空蟬・夕顔の三巻でほぼ語られる。この三巻は帯木巻頭と夕顔巻末の呼応が示すように、三巻でひとまとまりの世界と物語を語っている。

それは、帯木前半で語られる雨夜の品定めで興味を喚起された中の品の女性（夕顔は下の品かとも見なされた）を相手にする物語である。それゆえ物語の背後には光源氏が属する上の品の世界と女性たちが敵然と控えており、中の品の女性を相手とするこの物語は光源氏にとつ

て、「好き」とども・「忍びたまひける隠ろへごと」（帚木三五）であり、「あながちに隠ろへ忍ぶ」くだくだしきこと（夕顔一四六）であった。であるから、これらの交渉は、光源氏にとつて、夕顔に執心した光源氏がこれを、「なほめに思ひなしつべくは、ただかばかりのすさびにても過ぎぬべきこと」（夕顔一一四）と思ひ、夕顔を死なせたことを「浮かびたる心のすさび」（夕顔一三二）の結果と考え、蔵人の少将を通わずと聞いた軒端萩と文通して、憎からず思う光源氏の態度に、性懲りもなくまた浮名を立ててしまふような「御心のすさび」（夕顔一四三）だと、語り手が批評するように、上の品の男である光源氏にとつては、まともに相手にすべきでない階層の女との遊びの恋だったのである。（ただ、故中納言兼衛門督の娘で、父の生前に入内の予定もあつた空蟬は、この範囲ではない余地もあるが、伊予介の後妻として扱われた実態は、受領の娘軒端萩の場合と径庭はない。夕顔は故三位の中將の娘だが、光源氏はそれを知らずに交渉していた。）

また、光源氏の女性交渉として、上の品、中の品間の女性たちとの交渉の対応関係もうかがえる。空蟬の場合は、光源氏が伊予介の後妻となつた若い人妻と通じたという点で、この時点以前に通じていた可能性のある、父桐壺帝の妃である若い藤壺宮と、そして桐壺帝の後宮に入る予定だったが父の死によりそれが頓挫し、受領の後妻となつた中の品に身を落とした点で、父の他界にもかかわらず遺言どおり入内を実行し、後見のない弱い立場の更衣ながら帝の寵愛を一身に受け、一子を儲けつつも周囲の嫉妬と非難の中で死んでいった桐壺更衣と、

主眼的に対応する。また夕顔は、五条の陋屋に名のみ人めいてはかなく花を開き萎れた女として、六条の邸宅に風流に暮らして朝顔の花咲く朝、光源氏を見送る貴女と対応し、さらに、光源氏が自己を解放でき、思いどおりに教育することを意図し、二条院に迎えることを考えた点で、光源氏がそれらを実行しえた紫上と対応する。同時に、光源氏が下の品とみなした夕顔と互いに身分と素性を隠して、それから自由な状況で愛し合つたという点では、宮廷と貴族社会の秩序を無視して桐壺更衣を寵愛した桐壺帝の状況とも対応している^⑦。そして、空蟬と夕顔相互も、光源氏と生き別れた中の品の女と、彼と死別した下の品と思われた女として、対応するとともに、夕顔との交渉を語る途中で、空蟬と軒端萩の動向も挿入的に語られ、光源氏におけるこの二人との交渉が、連続・並行のものであることが示されるのである。

こうして、空蟬と夕顔との交渉は、上の品の女性たちと対応させられつつ、彼女ら二人も対照させられ、一体のものとして語られている。さらに空蟬には、弟の小君、継娘の軒端萩という、光源氏にとつての空蟬の身代わり・代行者がいるが、こうした人間関係の構図を認識しつつ、光源氏にとつての空蟬の喪失体験の経緯を見てみよう。

光源氏は、空蟬に現場的には二つの事情により近づいた。一つは、帚木巻冒頭に「長雨晴れ間なきころ、内裏の御もの忌みさし続きて、いとど長居さぶらひ給ふ」（帚木三五）とあつたように、父帝の物忌が連続して、光源氏も宮中に長期滞在していたことによる性欲の昂揚である。この間当事者の天皇は、『禁秘抄』（群書類従雑部）によれば、

総じて他の殿舎に出御せず、諸事簾において処理し、物忌みが固く
ないときには広廂に出御することもあった。行動が慎まれるのである。
未だ確認できていないが物忌の間、女性との性交渉も避けられたので
はないか。光源氏も帝の物忌に従って宮中に籠っていた。行動を慎む
こと、帝に准じていただろう。物語でもこの後、光源氏の伴をする
「すぎがましきあだ人」の頭中将、物忌に籠ろうと光源氏の許に来た
「世の好き者」の左馬頭、藤式部丞ら、活力あふれる男四人が一室に
籠って女性談義（雨夜の品定め）を繰り広げるのだが、彼らは女の許
へは赴かずにいる。女との交渉を慎んでいるように見える。であるな
らば、父帝の物忌に従って宮中に、厳密には曹司である淑景舎に籠る
生活を続けていた光源氏は、女性との接触が常の生活よりかなり少な
い状態であったのだろう。だから翌日宮中を退出して久しぶりに葵上
のもとを訪れたのに、方塞りで夜を過ごせず、方違え先の紀伊守邸で、
紀伊守が光源氏の突然の来訪を、父の伊予介家の女性たちが滞在して
いるからと困惑するのを聞いて、「女遠き旅寝はもの恐ろしきここち
すべき」と言ったり、紀伊守の接待に、「とばり帳もいかにぞは。さ
るかたの心もなくは、めざましき主ならむ」と、催馬楽「我家」を
引いて女性を求めたり、皆が寝静まっても光源氏は、「君は、とけて
も寝られたまはず、いたづら臥しとおぼさるるに御目さめて」と語ら
れたりして、女性の身体への欲求が露骨に表出されているのも、宮中
の物忌滞在中で、女性を遠ざけていたからであろうと思われる。

光源氏が、空蟬に近づいたもう一つの事情は、紀伊守邸を訪れた光
源氏が、「かの中の品に取りいでて言ひし、このなみならむかしとお

ぼしいづ」とあるように、左馬頭が、「中の品のけしうはあらぬ選り
いでつべきころほひなり」と、推奨した中の品の女性への興味である。
後の夕顔巻でも、大式乳母の家の隣人の素性調査の報告を惟光から聞
いて、「かの下が下と」左馬頭が問題外とした階層の女と推察される
隣人夕顔とともに、空蟬のことを思い出し、「かやうのなみなみまで
は思ほしかからざりつるを、ありし雨夜の品定めの後、いぶかしく思
ほしなる品々あるに、いとど隈なくなりぬる御心なめりかし」（夕顔
一〇七）と、語られている。

前述したように、女性の身体への欲求を高めて、宮中からの方違え
により、伊予介邸から女性たちが移ってきていると聞いて紀伊守邸を
訪れた光源氏は、「思ひあがれるけしきに、聞きおきたまへるむすめ
なれば、ゆかしくて」と、その女性に興味を持つ。この「むすめ」は
空蟬の事であると解するのが一般だが、『日本古典文学全集』本が頭
注で「伊予介の娘、軒端萩の事とする見解もある」と言うように、軒
端萩である可能性もある。光源氏は、故衛門督の娘空蟬が、後宮に入
れようとした父の意向を実現させられず、伊予介の若い後妻になつて
いることを事前に知っていたが、軒端萩についても、空蟬巻で空蟬と
碁をうつ軒端萩を垣間見した際に、「すべていとねぢけたるところな
く、をかしげなる人と見えたり。むべこそ親の世になくは思ふらめ、
とをかしく見給ふ」（空蟬八七）と思っており、事前に伊予介が娘軒
端萩を自慢に思っていることを光源氏が知っていたことが知られるか
らである。

だが、この後、紀伊守の子や伊予介の子が何人もいる中で、「いと

けはひあてはかにて、十二三ばかりなる」（帚木六六）空蟬の弟小君の存在に目をつけることで、事前に事情を知っていた空蟬が現在紀伊守邸に滞在していることを確認し、「いづかたにぞ」と、空蟬の居場所を紀伊守に尋ねる。「いとけはひあてはか」な少年の姉である空蟬に興味をもったのである。逢瀬の後に空蟬への仲介役として小君を得るべく、左大臣邸に招いた紀伊守に、光源氏が空蟬の容貌について「よろしく聞こえし人ぞかし。まことによしや」（帚木七三）と問いただしているように、空蟬が美女であるという噂も耳にしていた。

（この質問時、既に空蟬と一夜をともししていた光源氏は、その時の体験からこの噂の真偽に疑問を抱いていたのだろう。あるいは、その噂自体、光源氏による意識的な仮構だったのかもしれない。）紀伊守は、「みな下屋におろし侍りぬるを、えやまかりおりあへざらむ」と、答えて間接的に空蟬が光源氏と同じく寝殿にいることを知らせた。

この経緯を見ると、「思ひあがれるけしきに、聞きおき給へるむすめ」が空蟬か軒端萩か決定できないこと、何人もいる少年の中から「いとけはひあてはか」な空蟬の弟小君に目を付けたことなどから、光源氏と空蟬の交渉には、軒端萩と小君も当初から関与していたこと、この二人が空蟬と一体のものであることが知られる。拒まれることで生じる空蟬への満たされない光源氏の思いはこの二人によつて代替・補償され、慰められる構図が当初からうかがえるのである。

この後、光源氏は、「いたづら臥し」と思つて眠れずにいたところ、「北の障子のあなたに人のけはひする」（帚木六七）のを、空蟬の休んでいるところだろうと推測して、「あはれや、と御心とどめ」、聞こ

えてくる小君との話し声から、空蟬の所在を確認して、空蟬を自分の寝所に連れ出し、逢瀬を持つ。だが、空蟬は、光源氏の行動をたしなめ、打ち解けようとせず、中の品に身を落とした自分が見下されて「いとかう仮なるうき寝」のおざなりの扱いを受けたことをつらく思い、嘆く。光源氏は、こうした空蟬の予想外の落ち着いて道理に満ち、毅然とした対応に、本気になって意を尽くして慰めるが、女の態度は変わらない。光源氏は、女が自分に打ち解けず拒んでいること、自分が女を喜ばせられず困らせていることに、これまでにない衝撃を受け、空蟬に本気になつていくのである。そして、これらの問題を解消する道筋として、これからの逢瀬を構え、後朝の文も受け取れない女の気持ちの思いやり、女に自分の気持ちと意向を伝えて慰めるべく、空蟬との間の消息の仲介役として小君を手に入れることにした。だからこの最初の空蟬との逢瀬では、光源氏は女が自分を拒んで打ち解けないという、これまでの上の品の女性では体験したことのない女の反応に遭遇し、衝撃を受けたのだが、大切な人やものをうしなつたという喪失感はまだない。初めて失敗したという思いなのである。（宮人や召人でない家庭婦人の中の品に対してであり、上の品でも葵上は打ち解けないが拒んではない。）

この後も、「君はおぼしおこたる時の間もなく、心苦しくも恋しくもおぼしいづ。思へりしけしきなどのいとほしさも、はるけむかたなくおぼしわたる」（帚木七六）と、空蟬への思いはすさびごとでなくなり、執心していく。だが、「思へりしけしきなどのいとほしさも、はるけむかたなくおぼしわたる」と語られるように、逢瀬の際、空蟬

が、

「いとかく憂き身のほどの定まらぬ、ありしながらの身に、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじきわが頼みにて、見なほし給ふ後瀬をも、思ひ給へ慰めましを、いとかう仮なるうき寝のほどを思ひ待るに、たぐひなく思ふ給へまどはるるなり。よし、今は見きとなかけそ」

（帚木七一）

と、切羽詰まつて真情を吐露したことに、その場では、「思へるさま、げにいとことわりなり」と思い、「愚かならず契り慰め給ふこと多かるべし」と語られていながら、空蟬の悩みの深さは理解できずにいる。その後、光源氏から手紙が送られてきて、「をかしきさまを見えたまつりても、何にかはなるべき、など思ひかへす」（帚木七六）空蟬の思いを知ることなく、愛を傾けて慰めていけば自分に靡いてく

るだろうと知っている。

それで再度、「例の、内裏に日数経給ふころ、さるべきかたの忌み待ちいで」（帚木七六）て、急に紀伊守邸を訪れ、空蟬と逢瀬を持つとうとする。しかし、空蟬は、そうした光源氏の心の深さを理解はするものの、「うちとけ人げなきありさまを、見えたてまつりても、あぢきなく、夢のやうにて過ぎにし嘆きをまたや加へむ」（帚木七六）。「とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心に心づきなくてやみなむ、と思ひ果て」（帚木七七）てしまう。再度光源氏と逢つても、同じことの繰り返しで、先はない、中の品に身を落とした自分の人生はもう決まった、自分から光源氏との関係は切り捨てようと、決心する。頭では割り切れない光源氏への思いのため、その後

折に触れた文通はするものの、再度の逢瀬を拒み続ける空蟬の態度はこれで最終的に固まった。

このように再度の逢瀬をかたくなに拒む空蟬の前に、光源氏は、しばらくはものも言われず「いたくうめきて、憂しと」思うものの、「人に似ぬ心さまの、なほ消えずたちのぼれりけるとねたく、かかるにつけてこそ心もとまれ」（帚木七八）、と空蟬を諦めることはできず、次の接近を試みる。そして、今回の不首尾による満たされぬ思いを、空蟬の弟の小君で慰めようとする。小君は、先にも空蟬の「寝たりける声のしどけなき」と、少年の「かれたる声のをかしき」声とが「いとよく似通ひたれば」（帚木六七）とあつたが、今かたわらに臥せた少年は「手さぐりの、細く小さきほど、髪のいと長からざりしけはひのさま通ひたるも、思ひなしにやあはれ」（空蟬八五）に、光源氏を感動させた。しかし、「例のやうにもたまひまつはさず、夜深ういでたまへば」（空蟬八五）とあるように、小君では空蟬への思いを満たすことはできない。気休めの慰みに過ぎないのであるが、当座の心の傷の手当てをすることはできた。少しは役に立っているのである。こうしてこの時の拒絶も、光源氏に喪失感を与えることはなかった。それは、前述のように、拒まれれば癩に障るものの、かえって征服欲が湧くという光源氏の性向による。

従つて、光源氏は、ひきつづき空蟬のことを「かくてはえやむまじう御心にかかり、人わろく思ほしわびて、小君に」（空蟬八五）あらためて、空蟬への手引きを命じ、忍び込んだ紀伊守邸で、空蟬と継娘の軒端萩とが碁をうつ姿を垣間見ることになるのである。そこで確認

したのは、容貌より人格的なたしなみのある空蟬の魅力であった。前述のように、光源氏は空蟬との最初の逢瀬時から、噂とは異なる空蟬の容貌に疑いを抱いていたと思われるが、一方、精神面においては、「すぐれたることはなけれど、めやすくもてつけてもありつる中の品かな、限なく見あつめたる人の言ひしことは、げにとおぼしあはせられけり」(帚木七三)と、雨夜の品定めにおいて、左馬頭が「受領と言ひて、人の国のことにかかづらひいとなみて、品定まりたるなにも、またきざみきざみありて、中の品のけしうはあらぬ選りいでつきころほひなり」(帚木三九)と語っていたことに、合点していた。現在の自分の境遇を観念して、光源氏の強引な行動をたしなめ、再度の関係を拒み続けている空蟬の心しらいに繋がる、眼前の空蟬の自己を知って周りに隙を見せない態度を、光源氏はたしなみがあると判じ、惹きつけられるのである。だが、同時に、華やかで美しく肉感的な継娘軒端菝にも、「あはつけしとはおぼしながら、まめならぬ御心はこれもおぼし放つまじかりけり」(空蟬八八)と興味が湧く。空蟬の人格・精神と軒端菝の容貌・肉体という魅力の対照の中で、光源氏は一つのみを選べず、どちらも手放せない。つまり、空蟬は、光源氏の心を独占する完璧な存在なのではない。中の品の家の女性という新たなステージにおいて、光源氏に初めて靡かないという精神的な個性によって、彼の征服心を掻き立てているにすぎないのである。そして、この後、寢室に忍び込んでくる光源氏に気づいて、空蟬が小桂を残して身を隠した結果、その場にひとり残された軒端菝に対しても、「かのかしかりつる火影ならばいかかはせむに、おぼしな」(空蟬九一)

つて契りを結んだように、精神的魅力に欠ける軒端菝に心はさほど惹きつけられずに、隠れ去った空蟬のつらい心ばかりが思われてはくるものの、軒端菝に關しても別れに際して、「この人のなま心なく若やかなるけはひもあはれなれば、さすがになさけなさけしく契りおかせ給ふ」と、捨て切ることもできずにいる。空蟬に対しても、「かくしふねき人はありがたきものとおぼすしも、あやにくにまぎれがたう思ひいでられ給ふ」(空蟬九一)と、繰り返される拒絶によつても、思ひは萎えない。

こうしてここでは、軒端菝の容貌・肉体という魅力に対して、空蟬の人格・精神の美質は、優位には立つものの相対的なものであることその優位さが、わが身の境遇を觀じて光源氏を拒むという新しさを中核としていることが知られる(後に、伊予介に対する貞操の堅さも評価されるへ夕顔一〇八)。だから、光源氏は空蟬への接近・征服の意思をそれにもかかわらず持続させるのであつて、喪失感は起らない。光源氏が、軒端菝の許から去るときに、空蟬の残していった小桂を持ち帰り、衣服の下に引き入れて、小君を前に臥せて休んだのも、眼前にその存在が欠落する空蟬の身代わりの意味もあるが、空蟬との再会を呪なつたという意味もうかがえる。万葉集には、

まそ鏡見ませ我が背子我が形見持てらむ時に逢はざらめやも
(万葉集卷十二)

逢はむ日の形見にせよとたわやめの思ひ乱れて縫へる衣そ
(万葉集卷十五)

と、形見が「再会をまじない取る呪具」であることを思わせる歌があ

るが、この小桂も、夕顔巻末で夫に伴われて伊予に下る空蟬に返される際、光源氏によって、

逢ふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖の朽ちにけるかな

（夕顔一四五）

と、詠まれている。これを返却するまで、光源氏は空蟬との逢瀬を期し続けていたのである。形見の小桂を空蟬に返すことによって、伊予に下る空蟬との物理的・精神的別れが明確になった。ここで、光源氏における空蟬の喪失体験はほぼ完成する。

その後、閑屋巻で、常陸から上京した空蟬に、光源氏は消息を送って再び接近を試みるが、実を結ばぬまま、空蟬は夫の没後に尼となり、後、光源氏の二条東院に迎えられる。これらのことは、光源氏の「まめ」を示す後日譚として見ることができ、空蟬との男女の交渉の実質は、夕顔巻まででほぼ語られおえたとみてよいだろう。

光源氏は、夕顔巻末における空蟬との生き別れまでは、再会を拒絶されながらも、逆に思いを募らせ、

かの空蟬のあさましくつれなきを、この世の人にはたがひておぼすに、おいらかならましかば、心苦しきあやまちにてもやみぬべきを、いとねたく、負けてやみなむを、心にかからぬをりなし。

（夕顔一〇七）

また、空蟬が伊予に下ると聞いて、「今ひとたびはえあるまじきことにや」（夕顔一〇八）、と小君を語らったように、光源氏は空蟬との再びの逢瀬を狙い続けていたのである。

そうした空蟬への思いが具体的な行動に移されなかったのは、一つ

は夫の伊予介が上京してきて、空蟬と同居していたから、さすがに忍んでいけなかったたのであり（これは、空蟬と影が重なる藤壺宮との逢瀬が、桐壺帝のいる宮中でなく、藤壺宮の里邸で実現したことと、対応している）、一つは、空蟬との交渉が膠着状態に陥っていた間に、夕顔という空蟬以上に光源氏の心を奪った女性と邂逅したからである。

三 空蟬と夕顔

空蟬巻に続く夕顔巻で、帚木巻の雨夜の品定めでの頭中将の体験談以来の再登場を果たす夕顔という女性の、光源氏の人生にとつての意味については、かつて考えたことがある^⑤。先にも触れたことだが、夕顔との交渉は、光源氏が下の品とみなした彼女と互いに身分と素性を隠して、それから自由な状況で愛しあつたという点で、宮廷と貴族社会の秩序を無視して桐壺更衣を寵愛した桐壺帝の状況とも対応しており、また、光源氏が自己を解放でき、思いどおりに教育することを意図し（雨夜の品定め、夕顔巻末の叙述による）、二条院に迎えることを考えた点で、光源氏がそれらを実行しえた紫上の場合とも対応する。つまり、光源氏は、両親の身分社会の秩序に抗する愛の在り方を、夕顔とのかかわりの中で追体験し、母桐壺更衣から藤壺宮を経て、紫上という理想の伴侶を手に入れ教育していく過程で、母と性格的共通性を有する夕顔を愛し、喪うことで、夕顔の侍女右近から、自分が熱中した夕顔という一人の女性の知らずにいた側面も知り、彼女のより包括的な姿を理解して、その後の己の人生の足場の一つを固めたのであ

る。

夕顔との死別と、空蟬との生き別れを比べてみると、嘆きは前者の方が絶対的に深い。空蟬に対しては、光源氏につれない態度を「ねたく」癪にさわると思うが、拒まれても、生き別れに際しても、泣くことはほとんどない。わずかに、前掲の「逢ふまでの形見ばかりと見しほどに」歌において、「ひたすら袖の朽ちにけるかな」と涕涙がかわされるのみである。これに対し、夕顔との死別の場合は、八月十六日某院で夕顔が気取られた時から、光源氏は涙を流している。喪失体験としては、夕顔との死別の方が深い悲しみを光源氏に与えたことは確かである。夕顔との交渉は、光源氏の心の奥底を掴み取り、生に深く関わっていたが、空蟬との交渉は、これまで見てきたように、自分を初めて拒む意外な反応に、光源氏の性癖が作動した体なのである。拒まれても落ち込むことなく、その場で弟の小君や継娘の軒端荻にその気持ちを向けていけたことから、光源氏の心は空蟬からかなり自由であることが知られる。

であるならば、なぜ空蟬との交渉が語られたのであろう。女の宿世を見据えて、心は傾きながらも光源氏を拒まねばならぬ自律する女の存在を形象化して後の物語の礎とし、そうした上の品以外の女の存在を、若い光源氏に知らしめることで、彼のその後の女性交渉と女性理解を裏から支える力の一つとするためであつたらうか。あるいは、空蟬を通して描かれなかった、桐壺更衣の可能態の人生、藤壺との密通の具体を読者に想像させ、物語を重層的に膨らませるため、であつたらうか。ただ、御法巻・幻巻における紫上の喪失体験につながつてい

くものとしては、夕顔との死別の体験が、より重い意味を持つことは、いうまでもない。そのことについては、これ以降の、光源氏の喪失体験を見渡しながら、考えていきたい。

〔注〕

(1) 藤壺宮は、自己の死期が迫って、「御心のうちにおぼし続けるに、高き宿世、世の栄えも並ぶ人なく、心のうちに飽かず思ふことも人にまさりける身とおぼし知らる」(薄雲六一五)と、自己の人生を、光源氏や紫上と同様に、栄耀とともに苦悩に満ちたものと把握するが、後に朝顔巻末で、光源氏が紫上に藤壺宮の噂を口にしたのを恨んで、その夜の光源氏の夢に出てきたことを考えると、光源氏や紫上の宗教心の深さとは、一段違っているように思える。

なお、源氏物語の引用は『源氏物語大成校異篇』により、まます記を変える。漢数字は頁数。以下、同じ。

(2) 源氏物語の中からそれぞれの例を示しておく。まず自分が愛する人物を指す例。

「……あやまちなけれど、さるべきにこそかかることもあらめと思ふに、まして思ふ人具するは、例なきことなるを、ひたおもむきにものぐるほしき世にて、たちまさることもありなむ」など聞こえ知らせ給ふ。(須磨四〇三)

ともかくも御覧する世にや思ひ定めまし、とおぼしよるには、やがてそのついでのままに、この中納言よりほかに、よろしかるべき人、またなかりけり。宮たちの御かたはらにさし並べたらむに、なにごとめざましくはあらじを、もとより思ふ人持たりて、聞きにくきことうちまづまじく、はたあめるを、つひにはさやうのことなくてしもえあらじ、(宿木一七〇三)

また、自分を愛する人の例。

「いはけなかりけるほどに、思ふべき人々の、うち捨ててものし給ひにけるなごり、はぐくむ人あまたあるやうなりしかど、親し

く思ひむつぶる筋は、またなくなむ思ほえし。（夕顔一〇三）
ほどほどにつけて、思ふ人に後れ給ひぬる人は、高きもくだれる
も、心のほかに、あるまじきさまにさすらふたぐひだにこそ多く
侍るめれ。それみな例のことなめれば、もどき言ふ人も侍らず。

（総角一六〇六）

- (3) 「光源氏の述懐―御法巻と幻巻との間」(京都語文16、二〇〇九年十一月)
(4) 小此木啓吾氏『対象喪失 悲しむということ』(中公新書57) 一五六頁参照。
(5) 拙稿「女をうしなう光源氏―前史、父桐壺帝の喪失体験」(京都語文20、二〇一三年十一月)
(6) 小此木啓吾氏前掲書二八頁参照。
(7) 村井利彦氏「帚木三帖仮象論・第二稿」、『山手国文論攷』3、一九八一年三月、吉海直人氏「夕顔物語の構造」、『日本文学論究』9、一九八一年十月、三谷邦明氏『源氏物語の言説』第二章光源氏という実存にも、これと重なる言及がある。なお、拙稿「夕顔と紫のゆかりの物語」、『京都語文』11、二〇〇四年十一月、および「狐の怪異と源氏物語」、『朱』11、二〇〇四年十一月、参照。
(8) 森朝男氏「形見―または送り返されるへふみ」、『古代和歌と祝祭』有精堂 一九八八年。
(9) 注7の拙稿参照。

（うえの たつよし 日本文学科）

二〇一三年十一月十五日受理